国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成28年10月1日発行　第40巻第10号通巻第469号

月刊みんぱく

2016 10月号

特集

造る人と博物館

未来のデザイナーを育てる博物館　野林厚志
芸術家がとらえた微小生物　楠岡泰
みんぱくの路地裏探訪　下道基行
最後は布のミュージアム　岩立広子
想像のためのスコア　mamoru

ニフレル・うまれる

小畑（おばた） 洋（ひろし）

昨年一一月一九日、万博記念公園のエキスポシティ内に〝生きているミュージアム「ニフレル」〟が誕生した。ニフレルは、海遊館が初めてプロデュースした施設で、水族館・動物園・美術館の要素を持つ、新ジャンルのミュージアムである。コンセプトは「感性にふれる」。子供の頃には誰しもが持っていた、小さな生き物や自然の現象に目を見はり、心惹（ひ）かれる感性。そんな感性を刺激し、ニフレルでの体験がきっかけとなって、来館者の日々の生活においても、新たな気付きが生まれて欲しいという思いを込めた。

展示全体のテーマは「多様性（多様ないのちと個性の繋がり）」で、様々な生き物の個性にフォーカスをあて、その魅力を分かりやすく表現することで、生き物と来館者を繋（つな）げられないかと考えた。そして、最もこだわったのが、彼らを忠実に美しく魅せる事。水族館や生き物に興味の無い人にも、彼らの魅力が直感的に伝わる展示を目指した。

そんなニフレルも、早いもので開業して一年が経とうとしている。来館者の反応は様々だが、エントランスから入り、最初の「いろにふれる」ゾーンでは、空間全体と水槽内の小さな生き物に対し、しばしば感嘆の声が上がる。大水槽では埋没してしまう小さな生き物に気付き、驚きを覚えてもらっている事を心から嬉（うれ）しく思う。また、「うごきにふれる」ゾーンでは、足もとや頭上を跳び回るワオキツネザルや、大きな風を起こし目の前を飛ぶモモイロペリカンに歓声が上がる。来館者と動物が同じ空間を共有する事で、今までよりもダイレクトに彼らの魅力が伝わっていると感じる。そして、このゾーンは「多様な行動」をテーマにしているため、自然界では出会う事の無い、哺乳類や鳥類が複数種同居している。当初は、彼らがどのように影響し合うか心配したが、お互いの距離を縮めたり伸ばしたりしながら、それぞれがバランスよく生活し、退屈になりがちな飼育環境下で、適度な刺激を与え合っている。また、来館者については、危害を加えない動きの遅い動物として認識されているようで、彼らはあまり気にとめていないようだ。このゾーンは、来館者（ヒト）も動物の一種として加わり、日々、変化を続けている点で今後が楽しみな展示だ。

新施設を創るのは初めての経験だったが、色んな感性や知識・経験を持つ人が同じ方向を目指して混ざり合うと、結果として新たなものが生まれると改めて実感した。人それぞれ見え方が違う、だから出来る事も違う、そして、人も含め全ての生き物は、個性的だからこそ魅力がある。これからも、色んな個性と繋がり合いながら〝生きているミュージアム「ニフレル」〟は成長していく。

プロフィール
1967年京都府生まれ。生きているミュージアム「NIFREL（ニフレル）」館長。海遊館開業当初より飼育担当として勤務し、国内では類を見ないジンベエザメの陸上長距離輸送や、希少なイトマキエイの飼育展示にも世界で初めて成功する。海遊館最大のリニューアル「新体感エリア」及び「ニフレル」建設の中心人物となって構想・監修をおこなう。

月刊 みんぱく

10月号目次

1 エッセイ 千字文
ニフレル・うまれる
小畑 洋

特集 造る人と博物館

2 未来のデザイナーを育てる博物館
野林 厚志

4 芸術家がとらえた微小生物
——博物館と美術大学のコラボレーション
楠岡 泰

5 みんぱくの路地裏探訪——映像音響資料収蔵庫編
下道 基行

7 最後は布のミュージアム
岩立 広子

9 想像のためのスコア——バタヴィア、1658
mamoru

10 ○○してみました世界のフィールド
シンセキのオバサンのような立ち位置
森 明子

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
マーマイト
河西 瑛里子

16 文化遺産おもてうら
開く? 閉ざす?——ふたつのヴァラームにみる宗教文化財とツーリズム
高橋 沙奈美

18 手芸考
糸と女——紡がれる物語
平芳 裕子

20 ながなんぢゃ
ネンっていったい何でんネン
庄司 博史

21 次号予告・編集後記

特集

造る人と博物館

博物館が収蔵・蓄積している資料や情報は、創作活動にどのようにかかわるのか。「インスピレーションの源泉、あるいは創造の場」としての博物館の役割、可能性を考える。

未来のデザイナーを育てる博物館

野林 厚志（のばやし あつし）
民博 文化資源研究センター

次世代育成のためのコンテスト

民博では二〇一六年八月から一〇月にかけて、台湾原住民族（台湾の先住民族の総称）の文化や歴史を表現したポスター作品を紹介する企画展「台湾原住民族をめぐるイメージ」（以下、「原住民族ポスター展」）を実施した。これらのポスターは、民博が学術協力協定を締結している順益台湾原住民博物館（順益博物館）において、二〇〇六年より隔年で開催している学生ポスターコンテストに応募され入選を果たした作品である。コンテストに応募できるのは基本的には高校生から大学生までであり、台湾の将来を担う世代が、ポスターのデザインを競い合う企画となっている。

台湾は、二〇〇二年に、「挑戦二〇〇八国家発展重点計画（二〇〇二―二〇〇七）」を発表した。グローバル経済環境、デジタル社会の到来、増大する大陸中国の経済的影響のもとで、いかに台湾の競争力を強化していくかということに取り組む経済計画であり、当時の民進党政権が進めようとする台湾本土化が強く意識されたものであった。政府は推進する一〇の計画をかかげ、e世代の育成、デジタルリテラシーと英語力をもった次世代の育成についてあげられたのが、「文化創意産業発展」、いわゆる文化的創造力を産業につなげるというものであった。

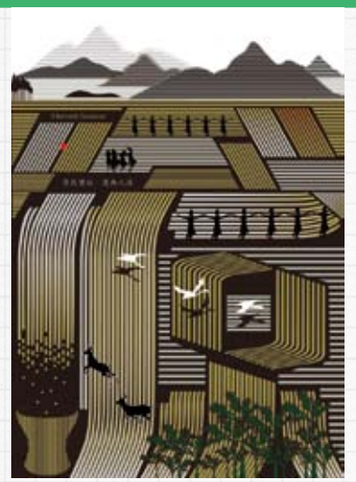
原住民族やその文化の社会における可視化の強化、デジタルコンテンツ生産の推奨、文化と産業の結合への志向性は、「原住民族ポスター展」の目的や性格に見事に合致してきたと言える。こうした時流をうまく読み取ることができたのは、順益博物館の母体が企業であるという社会の動きに敏感な環境にあったからであろうと筆者は考えている。

「祝祭の石板―豊年祭（慶典石板―豐年祭）」（作者：李翊慈、制作当時の所属：國立臺灣藝術大學）

原住民族とともに

順益博物館は、日本の自動車企業の台湾における現地代理店を中心とした企業グループがメセナ活動として一九九四年に設立した博物館である。展示、教育、研究、収蔵という四つの柱をもとにして、「大衆」と「学術」の相互的な結びつきを深めようとする理念を開館当初から考え、「DIY教室」とよばれる来館者参加型のワークショップや原住民族の集落への研修や集落との共催展示会である「部落特展」の実施等、来館者と原住民族重視の姿勢を一貫して取り続けてきた。

民博は順益博物館と二〇〇六年から学術協力協定を締結しており、二〇〇九年には民博が所蔵する資料を順益博物館で展示する、いわゆる里帰り展示となる「百年來的凝視」展を共同開催した。「原住民族ポスター展」はロンドン大学やカリフォルニア大学バークレー校で小規模な展示会を実施してきたものの、本格的な展示会を海外で開催したいという順益博物館の意向もあり、民博で開催する運びとなったのである。


「祖先の実り 祝祭の源（原民豐收, 慶典之源）」（作者：蕭妍汝、制作当時の所属：國立臺中科技大學―商業設計系）

「台湾原住民族をめぐるイメージ」展の展示風景

文化理解の場としての博物館

学生の作品とはいえ、デザインを専攻しているだけあってどの作品も創意と工夫に満ちており、鮮やかな色彩や躍動感にあふれたポスターはかなり見ごたえのある展示会にしてくれたのではないかと思っている。

もっとも、このポスターコンクールは手放しで褒められるわけではない。それはポスターを制作するうえでの課題となっている原住民族の文化や歴史について、それぞれの作者がどこまで正確な知識、理解をもって創作活動に取り組んだのかという問題である。文化や歴史について誤解していたり、知識の欠如がみてとれる作品も入選していたりする。このことは、台湾社会のなかで学生が得られる原住民族の文化や歴史、社会についての情報を反映しているとも言える。学生が原住民族、非原住民族の双方を納得させるような作品を制作するために役に立つ環境を整えることが次に求められることである。博物館はまさにそうした理解を深めるための空間にほかならない。ポスターコンクールとその展覧会は文化の理解という大きな課題に博物館が取り組むうえで、ユニークかつ有効な活動であり続けるだろう。

芸術家がとらえた微小生物

博物館と美術大学のコラボレーション

楠岡（くすおか） 泰（やすし）
滋賀県立琵琶湖博物館特別研究員

ノロ（日本最大のミジンコ）の巨大オブジェと微小生物のレリーフ。宇野先生と子どもたちとでプランクトンの模型を作るイベントにて

サイエンスとアートの出会い

小学生のころ、顕微鏡を買ってもらい、初めて家にあった水槽の藻を拡大して観て以来、この世界に魅了されている。プランクトン（浮遊生物）に代表される水中の小さな生き物たちは、陸上の生き物とは異なり、左右非対称であったり、幾何学的であったり、とても魅力的な形をしている。プランクトンの造形美をもっと一般の方に伝えられないかと考えていたが、如何せんわたしには美的センスがない。そんな折、成安造形大学の宇野君平先生と出会う機会に恵まれた。宇野さんは金属を使った造形作家で、ある日、琵琶湖博物館に滋賀県における古代製鉄について調べに来られた。そのとき、朝採れの生きたプランクトンを顕微鏡で観察できる展示に目がとまった。何か感じるものがあったのか、プランクトンの担当者に会えないかとわたしに連絡が入った。さっそく展示室に出向くとそこに熱心に質問される先生がいた。これが縁で、宇野さんはプランクトンをモチーフにした巨大な鉄のオブジェを造るようになり、また共同で「プランクトンでアート」と題して子どもたちとプランクトンを採集し、顕微鏡で観察したうえで造形物を造るイベントを開催するようになった。

マイクロアクアリウムプロジェクト

琵琶湖博物館は二〇一六年七月、リニューアルオープンした。そのひとつの目玉として、微小な生き物に焦点をあてた展示空間、マイクロアクアリウムがある。計画中、何か別の視点でミクロな生物を紹介できないかと、宇野さんに相談した。その結果、成安造形大学の学生に授業の一環として、微小生物をモチーフとしたオブジェを造ってもらい、展示したらどうかということになった。博物館内部でプロジェクトの細部を詰めていたところ、どうせなら、ミクロの世界を巨大な映像で紹介する「マイクロシアター」に壁画を描いたらどうか、とか、シアターのイスも微小生物をモチーフにデザインしたらどうか、などの意見が出て、「オブジェ・レリーフ」「壁画」「イス」を作る三つのプロジェクトを立ち上げることになった。

学生を募集したところ、七〇名ほどの履修希望者があった。まず、学生に博物館に来てもらい、自分でプランクトンや付着生物を採集し、それを顕微鏡で観察して、それぞれのお気に入りをスケッチしてもらった。次に大学で学生が作った模型やデッサンに対してそれぞれの生物の担当学芸員が意見を述べた。

実際の制作は授業履修者のなかから積極的に作品を造りたい者を募り、二〇一五年秋から実施した。イス班はイメージだけでよいが、オブジェ・レリーフ班および壁画班は細部までこだわった作品をお願いしているため、詳細な観察が必要である。問題は光学顕微鏡では重なっていて詳細がわからないことがよくある。実際に作品を仕上げる段階になると、細部に関する問い合わせのメールが次々に学生から来る。自分の専門の繊毛虫（原生生物）ならまだしも、専門以外の生物となると文献に頼るしかない。専門書を何冊もめくり、インターネットで論文を探し、やっとのことで学生に回答する。これが日に何件もあるとなかなか大変である。

博物館で微小生物を観察する学生（撮影・ロビン・スミス）

今回のプロジェクトで、博物館はこれまでにない展示を実現でき、大学は地域に対して存在感をアピールでき、学生は自然科学者という異なる人種と接する機会と、自分たちの作品が博物館に常設展示されるチャンスを得るという三方よしという結果となった。

みんぱくの路地裏探訪

映像音響資料収蔵庫編

下道（したみち） 基行（もとゆき）
民博 特別客員教員

美術家／写真家という表現者の立場で、今年から特別客員教員として民博にかかわることになった。大変光栄なことであると同時に、民博という国内にある巨大な異世界の内部を〝フィールドワーク〟できることに鼻息を荒くしている。

僕が取り組む仕事内容は「写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究」。つまり、博物館のその背景にある膨大な調査で撮影された写真や映像のアーカイブスの再活用を表現者という、外からの目で考察する試みである。今回はここ数カ月で見つけた写真のアーカイブスを巡る小さな風景について書いてみようと思う。

写真のなかを旅する

民博の施設内でも奥まった所に「映像音響資料収蔵庫」は存在する。温度湿度が管理され少し肌寒い室内にはハンドル式の棚が無数に並び、膨大な量の写真や映像や音響資料が収蔵されている。別の部屋では日々、白手袋をした女性がせっせとアルバムからポジフィルムなどを外し、スキャンのための下準備がおこなわれていた。写真資料のデジタル化は二〇〇〇年あたりから進められているという。

収蔵庫のなかに入り棚の端っこから、写真が丁寧にナンバリングされまとめられた束をランダムに指定し出してもらう。手伝ってくれるスタッフの女性は、写真の束を手に取る度に「あぁ〇〇年のアフリカ調査の〇〇さんかぁ。この方は……」とそれぞれの研究者の方にとても詳しく、ときに思い入れもあるようだ。写真を一枚一枚丁寧に見ていく作業は目的のない旅のようだ。特に探しているものはなく、自分のなかに余白の部分をもちながら小さな発見や疑問が引っかかってくるのを待ちながら彷徨う。目の前には何十年も前におこなわれたアフリカ調査の写真の山。人類学を学んではいない僕にとってはまったく触れたことのない世界。集落、道具、人びとの生活などの資料として意識的に撮影された写真から、調査団のベースキャンプでの風景や地元の人との交流や食事風景、特に人びとの〝別れ〟のシーンはフィールドワークでの心の交流が目に見えるようで、「研究資料」としてだけはなく、「旅写真」として心に触れるものもあった。

さまざまな箱が積まれた収蔵庫の入り口

モノがデジタル化されるとき

すでに、デジタル化された写真の一部はホームページにアップされ閲覧することもできる。

それらモニター上で見た写真と収蔵庫で見ている写真との違いに小さな発見の手応えを感じた。それは台紙やフィルムのマウントなど写真の周辺に残る手書きのメモなどの痕跡。もちろんデジタル化された写真にも文字情報は丁寧に付属されているが、写真とともに台紙／ケースと書き込みが一体になった〝モノ〟としての独特の存在感がある。

さらに写真だけではなく、〝入れ物〟に注意して改めて見ていくと、ある棚では半分ぐらいはカラフルな箱やアルバムが並んでいるのに、その途中からはすべて同じデザインの箱に移り変わっていく。同じデザインの箱はデジタル処理を終え移し替えられた保存用の中性紙箱（資料の劣化を防ぐ）だという。デジタル化によって移り変わる収蔵庫の棚の風景は、〝駅の路地裏の凸凹した有機的な町並みが徐々に真新しいマンションに開発されていく風景〟のようだと思った。

上：中性紙の箱ともともと写真が収められていた規格外の箱が棚に同居する
左：いろいろな箱を棚から出して並べてみた

空っぽの入れ物には何が宿る？

棚の端のワゴンが目にとまった。そこには、中性紙箱にまとめられた写真やフィルムが元々入っていた空き箱や袋があった。例えば、写真屋さんの情報やメモが残るフィルム現像を出したときの袋、ポジフィルムのマウントもさまざまな形と書き込みがあり、さらにフィルム入れとして使われていたクッキーの缶（「泉屋京都店」の缶はいろいろな研究者が使っていた！）など、写真やフィルムから外された〝入れ物〟たちが積まれていた。中身が生まれたときからそれを保護し、ときには移動にも耐えた容器は、さまざまな地名や人名やメモの書き込みやただの汚れや、線で消された情報すらもひとつの情報が層となり見るものに語りかけてくる。

これらの入れ物は捨てられる訳はなく保存されるのを待っているのだという。ただ、民博の場合、物は博物館の収蔵庫、フィールドノートなどは図書館、写真などはこの収蔵庫とわかれて管理保存されていることもあり、写真自体は内容は情報化され現物は映像音響資料収蔵庫に入れられるが、この文字の書かれた入れ物をどの部署でどのように扱うかは、現在宙ぶらりんな状態であり検討されている最中だという。

先日、とある博物館のアーカイブス担当の友人に、話を聞かせてもらったが、それぞれの博物館によって収蔵やいろいろな方向性の違いがあるものの、物と情報と文献（ミュージアムとアーカイブスとライブラリー）の中間領域をどうとらえ、横断的に紐付けしていくか考える時期が来ているそうだ。

「あ、そういえば、箱の転用だったら、〝茶箱〟もあるわよ。お茶は空気に触れさせないように作られているから、ある種類のフィルムの保管にぴったりなのよ。あとカセットテープの箱は……」と、〝入れ物〟という新しい視点でスタッフの方と僕は小さな発見を繰り返し盛り上がった。今回の映像音響資料収蔵庫探検は、写真的大発見などという本道ではなく、路地裏路地裏へと進んでいく結果となった。しかし、多くの研究者たちの残した膨大な足跡とともに、この収蔵庫にはまだまだ新しい発見が眠っているに違いない。

最後は布のミュージアム

岩立 広子（いわたて ひろこ）
岩立フォークテキスタイルミュージアム館長

自分の行く道は

幸運にも、ふたつ年上の姉が、わたしの女子美術大学工芸科行きを強く押してくれた。自分の気持ちに正直にねといって。経済的負担と同時に、創造的な仕事が自分にできるかどうか。しかし入学してみたら、織も染の先生も、どんなものを作っても何かしら良い所を見つけて褒めて下さり、力を合わせてやった共同制作は、逆立ちをして「すごいぞ」と喜び合った。わたしの不安は杞憂（きゆう）に終わり毎日が楽しかった。

第五回 岩立広子 染色展 於 銀座文春画廊　1962年

卒業と同時に、わたしのアルバイト先のブティックから、染色展を依頼された。気軽に引き受けたものの、実際自分でやってみると何ひとつ思う様にできず、じつは何も身についてなく、冷や汗をかきながら一人で実験を重ねた。何とか五十点くらいの服地や壁掛けができあがり、美しく飾って頂いた。見知らぬ客が珍しがって買って下さり、大半が売れて、また来年もと、信じられないオファーが来た。五、六回目は、銀座の文春画廊というわたしにとってはもったいないような立地条件で展覧会ができた。七割方売れて成功だったが、制作には大変な時間と材料費を使うため、続けていくには限界に近いものを感じた。既製品の布や衣服も安価で良いものが手に入るようになり、それに太刀打ちするには、よほどの能力のある者だけが生き残れる時代になって来た。自分の行く道をあらたに考えなくてはならなかった。

ナスカ期の土器、トウガラシの文様　1965年収集

アンデスの地で出会った傑作

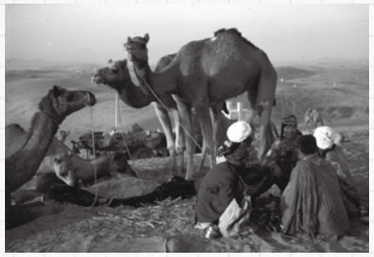
一九六五年、新しい道を求めてアンデスの地に向かうことにした。最初にNYに向かい、博物館や現地の工芸作家の活動を見た。北米先住民の織物、ビーズ細工。アンデスの出土の土器や織物はどの美術館も充実していて、至福のときを過ごしたが、現代の工芸作家の作品は活気がなく、がっかりした。

デパートの布地売り場でマリメッコの布地を見つけ、喜んで二メートル買った。その近くにあったインドの木版更紗も二メートル買った。マリメッコの布地はインド更紗の十倍の値段だったが、憧れていたし今でも大好きで、NYで出会った唯一の布だったので心底喜ん

使い古しの薄い布地を数枚重ねて、蓮文、ペーズリー、孔雀を刺繍し全体を縫いしめる
ベンガル地方のカンタ

だ。しかし、マリメッコの布地は色の彩度が違うのか、いつも他のものと融和せず、インドの布地の方が地味だがしっくりして身体になじみ、服にして長く使った。まさかこの五年後にインドに行き、四〇年も通い続けるとは思ってもいなかった。

NYのあとペルーに飛び、インカ帝国の遺跡を訪れた。発掘された土器には、縄文時代のような渦文、鳥文様などの動物文、そして花より野菜、ジャガイモ、トウモロコシ、カボチャ、ナス、トマト、ピーマン、豆類などいちばん大切な食物のすべてが活き活きと描かれていた。これらはコロンブスがアメリカ大陸に到達するまでアジアにはなかったものであり、何という人たちなのだろうと思った。そして、染織品の傑作の数々も副葬品として地中に埋葬していた。膨大な時間をかけて織り上げた不思議な、しかし素晴らしいデザインの染織品は現代の織機では不可能に思われた。これらの布を自分で再現してみようと思った。頭を柔軟にし、実際に筬（経糸を整える櫛のような道具）を使わず、時間をかけて取り組んでみた。膨大な時間はかかったがなんとかできた。どんな織り方も自由自在に入れられる。織機から完全に自由になり、人間が主役になれるのだ。ただし膨大な時間がかかる。能率を考えない。それは現代社会が失ったものである。


インド ラージャスタン州、プシュカルのラクダ市　1984年

調査、収集、そして公開へ

わたしは増々、染織の面白さに惹かれ、今度はわたしたちが住んでいるアジアをもっと知りたいと思った。一九七〇年、インド全土とネパールをまわる旅を考えた。世界美術全集からインドの全図の重要な所を拾い出し、すべてを飛行機と列車を乗り継いで一巡する旅程を立てた。幸い、インドはかつて英領だったので、どんな田舎でも誰かしら英語を話す人がいて、南米の様な不安はなかった。昔からの手仕事が雑草のように残る村々を数年かけて探し出した。染物や織物の現場を訪れると、急に自分がやっていた染物の仕事が、ちっぽけで頭でっかちな物に思われた。村の仕事は大らかで、悪くいえば大雑把だが、皆が嬉々として仕事をしていて楽しかった。

少しずつ北から南、西から東と染織の旅を続けた。九〇年代に入り、インドが経済の自由化を宣言すると、見る間に外国商品の輸入が始まり、資本の提携が一気に進んだ。テレビが入り、ケータイが普及し、崩れるように古くさいインドからモダンなインドに変身した。わたしの現地での記録も過去のものとなり貴重になってしまった。

その長年に渡る旅の記録とともに、手元に集まった八千点ほどの染織品は七年前に自ら立ち上げた「岩立フォークテキスタイルミュージアム」という安住の場所に納まり、一昨年には一般財団法人として認められた。さまざまな切り口で年に三回の展示を催し、次世代に繋げるべく広く公開している。現在は、わたしが旅で初めて出会ったアンデスの古代の織物と、それを受け継いだ中南米の現代の染織品を展示している。小さな美術館ではあるが世界中の珠玉の染織品を並べています。ぜひ観にいらしてください。

現在展示中の「アンデスの織物と中南米の衣装」展　2016年11月12日（土）まで

想像のためのスコア

バタヴィア、1658

mamoru
サウンドアーティスト

六ペンスの風
――フルートと言葉による二重想
右：mamoru
左：フルート奏者・木埜下大祐

バタヴィアの音風景

〝むせ返るような熱帯の暑い空気。遠くの空には入道雲が立ち上り、黒く低い雲が近づいている。雨が近い。区画された道の両脇にきちっと立ち並ぶ三階建ての家々。その向こうからは椰子の木々が午後のそよ風に揺れ、木の上を渡り歩く人影も見える。通りを往き、大きな角を曲がると、賑やかで騒がしい音が近づいてくる。と、同時に種々雑多な肌の色の人びとの姿が目に入り、甘ったるい香りに乗せて、果物の名か何かを売り子が歌うように連呼する。耳慣れないさまざまなことばの響きと笑い声。ここは市場。その脇にはバタヴィアの偉大な川、カリ・ベサール。川の向う岸にはオランダ人の作った大きな砦が見え、馬に乗った人びとが往来する。〟

これまで音や聴くことを取り扱った作品を作ってきたがここ五年くらいは、いろいろな資料を集め、歴史上の人物や事柄に関係する場面の音風景を書きおこし「想像のためのスコア」として発表したりしている。冒頭の文章は、一七世紀来の日蘭関係に興味を持ってあれこれと調べていた際にアムステルダムにあるトロッペン博物館で目にした「バタヴィアの風景」（一六六二年ごろ）と題された絵、当時の地図などを元に書いたものの一部だ。

聞こえてくるもの

この絵画の細部からさまざまな音を想像するために後日トロッペン博物館の東南アジア担当のピム・ウエスターカンプ氏に協力を依頼した。インドネシアをフィールドとする文化人類学者であるウエスターカンプ氏は、例えば臼の脇で棒をもちあげている人物を見つけ、現在でも伝統行事の様にしておこなわれている脱穀の様子ではないかといって動画を検索し、心地良いリズムにのって軽やかに木を打ち付け合う様子を見せて下さった。他にも「耳慣れないことば」には、当時の市場での共通語であった古いマレー語が含まれるだろうと教えて下さった。

絵画「バタヴィアの風景」、またその原画と目される「バタヴィアの市場」（1658年ごろ、アンドレアス・ベークマン）を紹介する様子

この絵の作者とされているアンドリエス・ベークマンはバタヴィア（現在のジャカルタ）で見聞きしたさまざまな事柄を他にも多々盛り込んでいる。興味深い要素のひとつに着物を着た人物がある。ベークマンは日本（出島）を訪れた可能性があり、その際に見かけた役人を参考にした可能性もあるが、東インド会社の傭兵として雇われていた侍や、迫害を受け海を渡ったキリシタンなどが当時のバタヴィアにもいた事が示唆されている。そう考えて、想像上の市場を再びめぐると、どこかから耳慣れない古い日本語も喧騒にまぎれて聞こえてくる。

※このページの写真2点ともに、国立国際美術館でのレクチャー・パフォーマンス「THE WAY I HEAR／想像のための幾つかのスコア」（2015）より。撮影・直江竜也

○○してみました世界のフィールド

シンセキのオバサンのような立ち位置

森（もり） 明子（あきこ）
民博 民族文化研究部

髪を作ってあげる――お願いします

ベビーシッターは、現代家族にとって心強い助っ人である。
ウィーンで長年シッターをしている師匠のもとで見習いをしてみた。

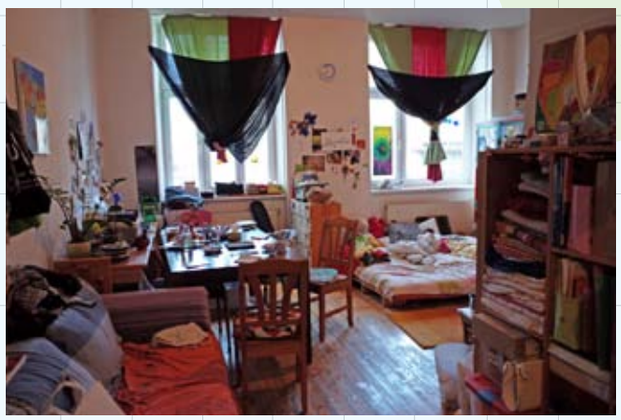
子どもを預かる

カロンは五歳の女の子、弟のコニは一歳半である。両親が医者仲間の舞踏会に出るため、一晩、二人を預かることになった。師匠の住まいに慣れている二人は、すぐにのびのびと遊び始めた。

リビングの古くて大きなマットレスは、師匠のベッドでもあるのだが、預けられた子どもたちの遊び場でもある。カロンは、窓枠によじのぼって、マットレスめがけて飛び降りる遊びが気に入ったらしい。そろそろやめさせようか、と動きかけたわたしを師匠は制して、彼女が飽きるまでさせておいた。

カロンの食事は、献立の交渉からはじまった。マカロニをゆでるような簡単なものだが、彼女のリクエストどおりの食材がすべてそろっているわけではない。師匠が、それに近いものをいくつか提案し、合意にこぎつけてから、作りはじめる。やっとできたものだが、彼女が食べるのは二口か三口くらいである。それでも食事は食事、これを終えなければ、デザートにはいかせない。

子どもたちにとって、デザートはいつも食事の最高の楽しみだ。多くの子どもが、デザートを食べるために、その前の主食を我慢して食べる。しかし、この日のカロンは失望することになった。師匠のオーガニックチョコレートは、彼女にとって「甘くなかった」からだ。


自宅のリビングルームでも、子どもを預かる

彼女の大好物は甘いものである。毎食、毎食間、チョコレートを食べたいという。「そんなに食べると太るよ」と、思わずわたしの口がすべった。彼女は本気になって気分を害し、師匠がすばやくとりなした。デリカシーのない冗談であったようだ。

寝る体制にはいってから、コニは約二時間、大声で泣き続けた。そのすぐ隣で、カロンは絵本に聞き入る。師匠は泣き喚（わめ）くコニを無視して、二時間声をはりあげて、絵本を読み続けた。わたしは、この三人の強靭（きょうじん）な体力と集中力にすっかり気圧された。師匠によると、二人の両親は、一人ずつ専従で、毎晩寝かしつけているのだという。「だから、カロンとコニは一緒に寝ることに慣れていない。でも、わたしのところでは、そんなことはしない」。ぴしゃりと言った。

シッター＝ママ＝トモを作る

子どもが、ほかの子どもと一緒にすごすのはよいことだ、というのが師匠の考えである。子ども同士、親同士、一緒にすごせば、学ぶことは多く、能力も引きだされる。

熟練のベビーシッターである師匠は、一〇軒以上の家庭の子どもを世話している。別々のソテをたどってきた子どもたちであるが、師匠は、彼らをできるだけ引き合わせようとする。また、自分がいつ誰の世話をしているかも、積極的に知らせる。

これによって親たちは、互いを少なからず知っていて、いつ誰がシッターを頼んでいるかも、およそ把握している。このことは、杓子（しゃくし）定規の契約だけでは対応しきれない子どもの世話において、柔軟に臨機応変の対応をするために、重要な素地をなしている。

予定外の事態に遭遇して、急にシッターを頼みたい、ということは、いつでも起こりうる。師匠は、そういう対応ができることを重視しているようだ。ほかの親たちに事情を説明し、一緒にシッターすることや、お迎えの時間と場所の調整に協力してもらう。日頃から、両親の了解のうえで、数人の子どもを一緒に世話することは、臨機応変の対応とも適合的である。

子どもたちの両親にとって、師匠は信頼できる子育ての助っ人であると同時に、友人関係の一角をなしているようでもある。趣味や健康、休暇や税金の相談など、さまざまな情報を交換し、助力もしている。つきあいの主要舞台はリビングルームで、家族ではないが、家庭内へ入り込む回路をもっている。子どもの視線からみれば、シンセキのオバサンのような存在かもしれない。このつきあいは、親と子の二世代を巻き込んで展開していく。

2児のママから「遊びに来て」の電話で、師匠（中央）は、1歳児と訪問した

保育園から迎えて家へ、途中で「ブラックベリーを買って！」

★ オーストリア、ウィーン

特別展
「見世物大博覧会」
本展では、江戸から明治時代にかけて大いに流行し、現代に至るまで命脈を保ってきた見世物の世界を、絵看板、錦絵、一式飾りや生人形（いきにんぎょう）など、さまざまな資料をとおして紹介します。
会期　11月29日（火）まで
会場　特別展示館

■関連イベント
「人間ポンプ　安田里美　浅草木馬亭公演」上映会
日時　10月16日（日）14時～16時（13時30分開場）
会場　本館第5セミナー室（定員90名）（予定）
司会　笹原亮二（本館　教授）
解説　鵜飼正樹（京都文教大学　教授）
※申込不要、参加無料、当日先着順

「伊勢大神楽の獅子舞と放下芸――伊勢大神楽講社による総舞」
日時　10月22日（土）13時30分～15時40分（予定）
会場　本館前庭（雨天時エントランスホール）
司会・解説　笹原亮二（本館　教授）
出演　伊勢大神楽講社　山本勘太夫社中
※申込不要、参加無料、当日先着順

展示イベント
「ハチュカル――アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」
本展では、ハチュカル（アルメニア石十字架）を展示の中心として、写真パネルと解説パネルにより、キリスト教を世界で初めて国教化したといわれるアルメニアの歴史と文化を紹介します。
会期　10月11日（火）まで
会場　本館ナビひろば

■関連イベント
ワークショップ「ハチュカル――拓本づくりでまなぶアルメニア十字架」
日時　10月9日（日）
11時～12時（10時50分集合）
13時30分～14時30分（13時20分集合）
講師　ゲヴォルグ・オルベリアン（本館　外国人研究員）
新免光比呂（本館　准教授）
会場　本館ナビひろばなど
対象　子どもから大人まで（6歳未満の方は保護者同伴でご参加ください）
※要事前申込（先着順／各回定員8名）、参加無料（要展示観覧券）

台湾文化光点計画　上映会・シンポジウム
「民族誌映画にみる文化への視点――台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」
上映会…台湾原住民や各国のマイノリティの文化変容をテーマにした民族誌映画の上映を行います。
シンポジウム…映画制作者による制作目的や映像アプローチの発表、討論を行います。
日時　11月12日（土）、13日（日）
10時30分～16時30分（予定）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）、当日先着順

公開講演会
私たち人類はどこへ行くのか？
「スイカで踊る、クジラを祭る――生き物と人　共生の風景」
私たち人類はどこへ行くのでしょうか。地球温暖化や生物多様性の喪失など、世界的に環境問題が注目されています。生き物と人との新しい関係から人類社会の未来について考えます。
日時　11月10日（木）
18時30分～20時40分（開場17時30分）
会場　日経ホール（東京、定員600名）
主催　国立民族学博物館・日本経済新聞社
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力係　06・6878・8209

国際シンポジウム
「中国における歴史の資源化――その現状と課題に関する人類学的分析」
日時　10月22日（土）10時～17時30分
会場　本館第4セミナー室（定員70名）
※要事前申込、参加無料、先着順

カレッジシアター
「地球探究紀行」
みんぱく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心にお話しします。
時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※事前申込（参加状況により当日受付あり）、参加費各回1000円（定員各回50名）
共催　産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団
10月12日（水）
身体でみる異文化――目に見えないアメリカを描く
講師　広瀬浩二郎（本館　准教授）
10月26日（水）
アンデスの文化遺産を活かす――考古学者と盗掘者の対話
講師　関雄二（本館　教授）
お申込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

●インフォレストすいたでみんぱくフェア開催
エキスポシティのインフォレストすいたで、10月31日（月）まで、みんぱくフェアを開催いたします。ミニ展示や楽器の体験、参加型のプレゼント企画などを実施します。

●11月1日から7日は「教育・文化週間」
教育・文化週間は教育や文化への関心と理解を深め、充実・振興を図ることを目的として設けられ、今年で58回目を迎えます。この機会に、全国で開催される様々な行事に足を運んでみてはいかがでしょうか。
教育・文化週間ウェブサイト（文部科学省ホームページ）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kyoiku-bunka/
※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

瀬戸内国際芸術祭2016連携事業
巡回展
「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
会期　10月8日（土）～11月27日（日）
主催　香川県立ミュージアム
国立民族学博物館
千里文化財団
会場　香川県立ミュージアム
休館日　月曜日（祝日の場合は翌日）

巡回展
「ワンロード――現代アボリジニ・アートの世界」
会期　10月1日（土）～2017年1月9日（月・祝）
主催　市原湖畔美術館（指定管理者株式会社アートフロントギャラリー）
会場　市原湖畔美術館
休館日　月曜日（祝日の場合は翌火曜日）

みんぱくゼミナール
時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂　定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）

第461回10月15日（土）
言葉から文化を考える――「アラブ的思考様式」再考
講師　西尾哲夫（本館　教授）
名著『風土』のなかで和辻哲郎はアラブ人を「服従的、戦闘的の二重の性格」をもった「砂漠的人間」と評していますが、このまなざしは日本人の中東世界観に依然として受けつがれています。アラブ遊牧民の日常的世界観を彼らの言葉を分析することで再考してみましょう。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。
10月2日（日）14時30分～15時　本館第5セミナー室
ベトナムの民族観光――マイチャウの白タイ族村落
話者　樫永真佐夫（本館　教授）
10月9日（日）14時30分～15時　本館第5セミナー室
魅せるモノ・魅せられるモノ――見世物のおもしろさを巡って
話者　笹原亮二（本館　教授）
10月16日（日）
14時30分～15時15分　本館第3セミナー室
人間にとってカフェとは何か
話者　太田心平（本館　准教授）
10月23日（日）14時30分～15時15分　本館ナビひろば
南米アンデス文明「ヘビ・ジャガー神官の墓」の発見
話者　関雄二（本館　教授）
10月30日（日）
14時30分～15時15分　中国地域の文化展示場
食からみる中国文化および世界とのつながり
話者　韓敏（本館　教授）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
ただし、2日（日）、9日（日）、16日（日）は参加無料（展示観覧券不要）

●みんぱく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通無料送迎バスを特別展「見世物大博覧会」会期中に運行します。
運行日　11月27日（日）までの土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分
運休日　11月3日（木・祝）、5日（土）、6日（日）
※万博記念公園でイベント開催の場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

大阪モノレール
万博記念公園駅発

時	万博記念公園駅→国立民族学博物館
10	06　36
11	06　36
12	46
13	16　46
14	26　56
15	26　56
16	
17	

国立民族学博物館発

時	国立民族学博物館→万博記念公園駅
10	50
11	20
12	30
13	00　30
14	10　40
15	10　40
16	30
17	00

訃報　加藤九祚名誉教授
本館の加藤九祚（かとうきゅうぞう）名誉教授（九四歳）がさる九月一二日、調査地のウズベキスタンで逝去されました。一九七五年、当館教授に着任され、ユーラシア民族学研究において独自の領域を開拓し、「北・中央アジア民族誌の基本文献についての基礎調査」ほか、共同研究を組織し多くの成果をあげました。七九年以降、第4研究部長として館長を補佐しつつ、さまざまな委員会の委員長として館の運営に貢献されました。貴重な標本資料やデータを集め、当館の中央・北アジア展示の基礎を築き、展示リニューアル後もその業績は活かされています。八六年の退官後は考古学への関心から、ウズベキスタンでの発掘調査に尽力されました。七六年に大佛次郎賞を受賞した『天の蛇――ニコライ・ネフスキーの生涯』ほか、多数の著書・訳書があります。謹んでお悔やみ申し上げます。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※当日先着順、会員証提示（会員外500円）
第460回　11月5日（土）13時30分～14時40分
【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】
エジプトにおける空手道の新地平――大衆文化にさぐる中東のいま
講師　相島葉月（本館　准教授）
中東地域を代表する空手大国、エジプト。競技人口は国内でサッカーに次いで二番目に多く、幅広い社会階層の人々が稽古に励んでいます。日本とは全く違った価値観から成り立っているように見えるエジプトにおいて、これほどまでに空手が受容されるのは何故なのでしょうか。宗教や政治的な動向ばかりが注目されがちな中東ですが、大衆文化にこそ彼らを知るヒントが隠されています。空手をとおしてグローバル化するエジプト社会の動向をさぐります。
●講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。

第88回民族学研修の旅
多民族国家ネパールの生活文化にふれる旅
映像がつなぐ人びとを訪ねて
2017年1月8日（日）～15日（日）、要事前申込

第74回体験セミナー
遠山霜月祭見学――神と人が集う夜
12月10日（土）、11日（日）、要事前申込
訪問先・長野県飯田市

【東京】連続講座
「素顔の地球に出会う――人類学者たちのフィールドワーク」
会場　モンベル渋谷店5Fサロン
時間　各回ともに13時30分～15時30分
※要事前申込、会員証提示（会員外1000円）
11月12日（土）
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師　佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹）

味の根っこ

イギリス発祥のペースト

マーマイト

河西 瑛里子（かわにし えりこ） 大阪物療大学助教

イギリスのスーパーの定番商品（撮影・編集部）

神々の食べ物？　一種の毒？

「イギリスの食事って、やっぱりマズイんですか？」

調査のためイギリスに暮らしていたことを話すと、しばしばこう聞かれる。マズイ料理の代名詞ともいえるイギリスの食事だが、ここ三〇年のあいだに移民の食文化が広がった影響で、格段においしくなったといわれている。それでも、外国人から「激マズ！」と評されるものもある。その代表がマーマイトだ。

この黒くねっとりとしたペースト、独特の匂いと味をもつ。あえていえば、醤油（しょうゆ）や味噌（みそ）の濃度を限界まで上げ、そこに少しビールを加えた匂いだ。舐（な）めてみると、かなり塩辛い。知らずに多量に口にすると、むせこんでしまう。そのため、イギリス人のあいだでも好き嫌いがはっきりわかれる。「神々の食べ物」と絶賛する人がいる一方で、「一種の毒」と酷評する人もいる。国内を二分する論争の決着をつけようと、二〇一〇年には「マーマイト選挙」という試みがおこなわれた。マーケティングの一環として、「（マーマイト）大好き党」と「（マーマイト）大嫌い党」を設立し、それぞれが党首とマニフェストを掲げ、「投票」をおこなったのである（ちなみに勝者は「大好き党」）。この好みの極端さ、日本の納豆に似ている。

ビール生産の副産物

じつは、納豆との類似点は他にもある。マーマイトは、要はビールの「酒粕（さけかす）」。ビールを醸造する過程で沈殿堆積した酵母を凝縮し、容器に詰めている。つまり納豆と同様、発酵食品なのである。

この独特のペースト、料理の隠し味にも使われるが、普通はトーストのお供として食卓にのぼる。わたしが初めてマーマイトを目にしたのも、あるゲストハウスの朝食の席であった。容器からジャムの一種かと思ったわたしは、ふたを開けて、そのあまりの「臭さ」に絶句した。そんなわたしの驚きぶりを笑いながら、ホストの女性は正しい食べ方を教えてくれた。「ほんの少し、少しだけ、トーストに塗って食べてみて」。しかしその味は匂いから予想されたとおり。マズかった。

抜群の栄養価

イギリスではビールの酵母をそのまま食べる習慣があったのだが、マーマイトという商品として販売されるようになったのは一九〇二年のことである。ティースプーン一杯で、ビタミンB群や葉酸の一日の摂取量の四分の一から半分を摂取できるという栄養価の高さが評判となり、イギリスだけでなく英連邦の国々にも広がっていった。二度の世界大戦からコソボ紛争に至るまで、兵士たちの栄養補助食として取り入れられており、近年では各国のベジタリアンのあいだで評価されている。なお、オーストラリアではベジマイト、ニュージーランドではビタメイトという類似品が開発され、人気を博している。

二〇一一年、デンマークが、製造過程におけるビタミンB12の添加を問題視し、輸入禁止の措置をとったというニュースがイギリスで大きく報じられた。その三年後、この禁止措置が解除されたことも、メディアで取り上げられている。他国でのマーマイトのおかれた状況まで話題になることから、イギリスでは、好きであれ、嫌いであれ、誰もが一家言をもっている様子が伺える。ソウルフードとはいえないが、イギリスを代表する食材であることは間違いない。

日本における反応

あるとき、イギリスからもち帰ったマーマイトを学生たちに試食してもらった。匂いを嗅いで「もう十分」と顔をしかめられたり、口に入れて「賞味期限きれてない？」と疑われたり、散々な評判だった。なかには、口にした瞬間、トイレに駆け込んだ学生もいた。

そんななか、一人だけマーマイトの虜（とりこ）になった学生がいる。「おいしい！」と気に入った彼女に、マーマイトを一瓶プレゼントすると、家族そろってレシピを考案してくれた。好きな人にはまるのだ。

日本でも、ネット通販や輸入食材店で手に入る。もし機会があれば口にして、自分が「大好き党」と「大嫌い党」、どちらの支持者なのか、明らかにしてみてほしい。

マーマイト味のポテトチップスもある

色と質感はマヌカハニー。
でもまったくの別物なのだ（撮影・編集部）

トーストにごく薄く塗るのが定番。チーズを乗せてもおいしい。とろけるチーズなら、すごくおいしい。
チーズは熟成チェダーチーズがお勧め（撮影・編集部）

マーマイトを入れて食べてみました――学生のレポートより

- カレー：隠し味に入れるとおいしい。ぜひ入れてほしい。
- 煮物：少しマーマイトの癖のある味がするが、まあおいしい。
- 親子丼（食前に混ぜる）：味にアクセントがついて、まあおいしい。
- スープ：マーマイトのエキスが出て、とてもまずい。

※ 味の濃いものに混ぜると、隠し味になっておいしいが、スープのような料理ではマーマイトの味が強くなりすぎてまずくなる。マーマイトには塩分が多く含まれるため、使用する際には料理の塩分を減らしておくことが重要である。料理の味が物足りない時には、マーマイトを少量入れるのもよいかもしれない。

※ 同じ発酵食品の味噌や醤油の代わりに使うのも、おいしいかもしれない。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

開く？ 閉ざす？
——ふたつのヴァラームにみる宗教文化財とツーリズム

高橋沙奈美
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教

古き伝統を守ろうとする旧修道院と、積極的に文化センターとなった新修道院。対照的な両者の姿は、文化遺産の「遺産」概念の多様性を物語っている。

世界遺産に登録されない至宝の景観

ロシア連邦北西部、フィンランドとの国境近くに位置するラドガ湖。そこに浮かぶヴァラーム島は「北のアトス」ともよばれ、ロシアの聖地と讃えられる。ここの男子修道院は毎シーズン一〇万人以上の「巡礼」という名の観光客で賑わう。そういわれてもピンと来ないかもしれないが、与那国島と同規模の二八平方キロメートルの小島に、たった三カ月の夏の観光シーズンでこれだけの人びとが訪れるといえば、その賑わいぶりが多少は伝わるだろうか。

顕栄大聖堂前でガイドの説明を受ける巡礼・観光客

修道院の創設は少なくとも一四世紀まで遡ることができる。当時、フィンランドまで版図を広げていたプロテスタントの大国スウェーデンと境を接していた修道院は、自然「正教の砦」の役割を担うことになった。つまりそれは、度重なる戦火による破壊を意味した。この運命のために、ヴァラーム修道院の建造物は史的価値をもつ文化財としては認められていない。修道院が最盛期を迎えたのは一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてで、現存する聖堂や僧坊、宿泊施設、苦行僧のための隠遁所が整備されたのもこの時代である。

ヴァラーム島の最大の魅力は、修道院と一体化した静謐な自然景観だといえよう。修道院の景観は、当時の知識人や芸術家に多大なインスピレーションを与えた。一八七二年にラドガ湖を旅した作家のN・レスコーフは、この体験をもとに『魅せられた旅人』を著したし、作曲家P・チャイコフスキーは交響曲第一番の構想をこの島から得た。また、I・シーシキン、A・クインジなど一九世紀ロシアを代表する風景画家たちが島を訪れ、北ロシアの自然と教会建築を題材とした多くの風景画を残した。

ヴァラーム島の船着き場のおみやげの露店

革命、戦争、ふたつの修道院の「遺産」

一九一七年のロシア革命後、ヴァラーム修道院は新興の独立国家フィンランドに属することになった。フィンランド正教会は自治教会として独立。ルター派が多数派を占める国において、正教会は圧倒的少数派となったものの、一九二〇―三〇年代にソ連全土を襲った無神論政策を逃れて宗教活動を続けることができた。一九三九年一一月、ソ・フィン戦争によってフィンランド東部に赤軍が進軍すると、修道士たちは西へ向けて疎開し、一九四〇年、ヘイナヴェシに新ヴァラモ（ヴァラーム）修道院を創設した。

新修道院の博物館展示。正教文化や修道院の歴史を紹介する

ソ連領内に残された「古い」ヴァラームは「酔っ払った付添婦と、誰も涙を流すことのない静かな死」ばかりが訪れる、ひなびた廃兵院・養老院に姿を変えた。養老院は一九八二年に閉鎖され、ペレストロイカで宗教政策が緩和した一九八九年、修道院が再開した。ソ連崩壊後の修道院は伝統的な聖歌に加えてその厳格さで知られ、二〇〇一年以降、一般住民を島から移住させる計画を進めている。修道院の訪問者の九割は観光客だとみなされているが、伝統的な修道生活を重視する修道院は、経済的利益は享受しつつもこれを歓迎しない。修道院の指導者たちは、修道士は聖山アトスのように世俗との交わりを極力控えるべきだと考えている。

新修道院の船でクルーズを楽しむ巡礼・観光客

一方で、新修道院はフィンランド正教唯一の男子修道院であり、同時に文化センターとして年間一六万人以上の観光客・巡礼を惹きつけている。二〇一二年、修道院は最優良の国内観光地に選ばれた。新ヴァラモには、快適な宿泊施設と食堂、そして正教的生活や文化を伝えるいくつもの文化施設がある。旧修道院と同様、その魅力が無数の湖に囲まれた豊かな自然景観やワイナリーにあることを理解した修道士たちは、多様な観光客に広く門戸を開き、観光業を修道院の維持のために利用することを選んだ。

「新しい」ヴァラームが文化センターとして多くの人に開かれた場所であるのに対し、「古い」ヴァラームは修道院本来の伝統を守るべく、その文化的景観を一目見たいと望む観光客を排除しようとする。ふたつのヴァラームは宗教とツーリズムが混ざり合う現代社会における宗教的文化遺産の在り方を端的に示している。

糸と女——紡がれる物語

平芳 裕子
神戸大学大学院准教授

女性の家庭内における「影なる仕事」であった裁縫は、賃金を得るための「労働」へと位置づけを変えた。しかしそのイメージは、今なお女性性とわかちがたく結びついているようだ。

図1：「私室」*Godey's Lady's Book*（1843年）より。レディの教養を示す品々。右下に作りかけの刺繍（図は部分）

図2：「お針子賃金」*Punch*（1849年）より

刺繍と裁縫のあいだに

手芸といえば刺繍や編み物などさまざまな手仕事が含まれるが、ここでは特に「裁縫」を取り上げてみたい。というのも西洋の歴史において、手芸と裁縫は同じ針仕事でありながら、しばしばまったくレベルの異なるものとしてとらえられてきたからだ。例えば、刺繍はどうだろう。刺繍を刺すとは、幼いころから刺し方を家庭で習い、実際に刺すための時間的・経済的余裕があり、素敵な作品を仕上げるための才能とセンスをもっているということ。つまり上流階級のレディのための教養として趣味として、もっぱら見せびらかすためにおこなわれた（図1）。それに対して裁縫は、女性ならば誰もが身につけているはずの生活技術であった。家族のための服作りから日用品の縫い物まで、かつての家庭には膨大な針仕事が存在した。それらは農婦や主婦の家事労働、もしくは下層階級の賃金労働であり、決してひけらかすようなものではなかった（図2）。日常的なありふれた光景であるか、さもなくば人目に隠れておこなわれるものだったのである。

女性性との結びつき

では、「裁縫」は、いつからどのようにして（刺繍のような）手芸的な価値を達成したのだろうか。糸を紡ぎ、布を織り、服を縫う。これら服作りのための作業が、産業革命によって機械化されるようになってからといえる。紡績機の発明と織機の改良によって、大量の布地が短時間で生産されるようになる。その結果、レディに憧れる中流階級にとっては、ドレスメーカーで服を注文するのは経済的に困難でも、布地は店に溢（あふ）れており、安く自分で縫うことができるようになる。しかしただ節約のためだけに服作りがおこなわれたのではない。女工やお針子の登場が、家庭内労働であった裁縫を次第に価値ある仕事へと変えた。紡績工場や織布工場で機械を操作するにしても、あるいは家のなかで内職の針仕事をするにしても、それらはすべて「賃金」を得るための労働であって、家族や自分のために主婦がおこなう「女性の仕事」とは厳然と区別されたのである。

もちろん、今の社会で服作りや裁縫を「女性の仕事」などと決めつけることはできない。しかし、歴史的には女性たちがそれらの仕事に携わってきたことは事実である。途中でやめてもすぐに再開できる単純作業が多いことから、家のなかで育児や家事をおこなう女性たちに適した仕事ととらえられてきたのだ。そして、そういった歴史の残像は、じつのところ、現代日本を生きるわたしたちの身近なところでも見ることができる。少し前になるが仕立屋を主人公とした映画「繕い裁つ人」（二〇一五年）が公開された。原作でも映画でも、「仕立屋」は街の喧騒（けんそう）を離れて一人静かに服を縫うのだが、主人公は「女性」であった。それも「女性らしさ」をことさら強調するように長いスカートをはいている。映画のなかで主人公が仕立てた服のデザインは、大手の手芸店でも紹介されて話題を呼んだ（写真1）。手芸店を訪れる女性たちは、「心を込めて服を縫う」主人公の姿に自らを重ね合わせたにちがいない。裁縫や手芸は、現代においても女性性のイメージと強力に結びつけられているのである。

写真1：手芸店の売り場に展示された映画「繕い裁つ人」の衣装デザイン

ヴィーナスが手にするものは

では逆に、古い例をひとつ。読者の皆様は「ミロのヴィーナス」をご存じのことと思う（写真2）。この古代ギリシャ彫刻は、一九世紀に両腕が欠けた姿で発見されて以来、「リンゴを手にしていた」とか「衣を押さえて恥じらっていた」など、さまざまな姿が想像されてきた。しかし考古学者のエリザベス・バーバーによれば、ヴィーナスの筋肉組織を分析してみると、そのような姿は考えられないそうだ。ヴィーナスは、左手で糸巻き棒を高く掲げ、右手で糸と紡錘（ぼすい）を操っていた、というのである。ヴィーナスとは愛の女神であるが、この古典的女性美の象徴が、何か新しいものを生み出すように糸を紡いでいた、とは何とも示唆に富んだ解釈ではないだろうか。女性たちは、もはや紡いだり織ったり縫う必要はないのだが、私たちの社会はいまだに「糸と女」の物語を紡ぎ続けているのだ。

写真2：《ミロのヴィーナス》前3-前1世紀、パロス大理石、ルーヴル美術館

ネンっていったい何でんネン

What's in a name?

庄司博史（しょうじ ひろし）　民博 名誉教授

アメリカ映画についてたいして素養はないが、映画のあと出演者やスタッフなど名が延々と続くクレジットを眺めるのが好きだ。そこにはアメリカらしくじつにいろんな国由来の人名が目まぐるしくあらわれ、知識を総動員して出身国を想像する楽しみはちょっとした中毒にもなる。ローマ字書きの日本人の名は、NOBORU TANAKAのように、単純な子音母音のくりかえしで冗長ではあるが結構目立ち、「おやこんなとこでも日本人が活躍しているぞ」とうれしくもなる。

なかでもおもしろいのは一目で出自国や民族がわかる名が多いことだ。たとえば「〜ヤン」ならば、ウィリアム・サローヤン（作家）のようにアルメニア人かその子孫であることがすぐわかるし、「〜ジッチ」がついていれば十中八九、ボスニアかセルビアなど旧ユーゴスラビア出身者だ。その他、どこそこ出身のという意味で、ド・ゴールのように「ド〜」ならフランス、ヴァン・ゴッホのように「ヴァン〜」ならオランダをルーツにもつ名であることもよく知られている。

さて、御存じのかたにはお待たせしましたが、フィンランドにもフィンランド人特有の名前がある。最後の部分にネン（NEN）のついた名字である。日本で知られている名としては、ミカ・ハッキネン（F1ドライバー）、ヤリ・リトマネン（サッカー選手）のほか、二代前の女性大統領タルヤ・ハロネンもそうである。フィンランド出身ながら日本国籍を取得して参議院議員を務めた弦念丸呈（ツルネン・マルテイ）さんも本名はトゥルネンである。

日本のお笑い番組でアホカイネン、パーヤネン（双方とも人名として実在します）が取り上げられて一気に知れ渡ってしまった「ネン」であるが、確かにフィンランドではネンさんは多い。人名の種類では五パーセントあまりなのだがネンさんの人口に占める割合は四割近いともいわれ、それだけネンさんにはよくぶち当たる。

さぞかしネンはフィンランド古来の伝統的な名と思われそうだがそうではない。かつて移動農民が多かったフィンランド東部では氏名（うじな）＝姓が個人の所属を示していたが、西部では農家の屋号が個人の同定に用いられ、移動の度に屋号は変わっても姓をもたない人びとは、一九世紀に入っても少なくなかった。近代化を進めていた当時の政府にとってこれは由々しき問題で、なかば強制的に姓をもつことが勧められた。その際手軽なモデルとなったのが東部で一部の姓にあったネンで、西部ではこれを姓の標（しるし）として「丘」「山」「川」などありふれた語につけて間に合わせたらしい。そもそもネンは形容詞を作ったり、親しみを込めて小さいものをよぶ際に用いられた語尾で姓に限られた要素ではなかったが、とにかくネンさんたちは爆発的に増えていった。二〇世紀初頭まで続いた姓作りのなかでネンの流行は比較的短命におわり、その後ネンなしにもどっていったらしい。とはいえ、地縁も血縁もない人びとのあいだに大量にうみだされた同姓のネンさんたちは、今日フィンランドのシンボルであることは確かだ。

月刊みんぱく 2016 10月号

編集後記

アーティスト・イン・レジデンス（「住み込み芸術家」？）を受け入れる制度は、一昔前までは現代美術関係の機関のものであった。最近は展示の対象が普段は「美術作品」とは限らない博物館が、クリエーターたちとの協働に新しい可能性を見出している。クリエーターたちにとっても、伝統的な意匠や自然が造り出す不思議な形などを収集し研究する博物館はインスピレーションの宝庫となる。

芸術家との共同制作を5年ほど前から積極的におこなっているフランクフルトの世界文化博物館の「世界文化ラボ」（Weltkulturen Labor）には、アーティストが文字通り「住み込み」で制作するための宿泊施設、スタジオ、展示空間までが整っており、研究者との濃密な交流の場が定期的に設けられている。一昨年、こうした共同企画の展覧会 *Foreign Exchange (or the stories you wouldn't tell a stranger)*を見る機会があった。

そこには「民族学」の名のもとには今や公開しにくい資料――例えば19世紀末の人類学者がインドネシアで現地の人の男性性器ばかりを写した一連の写真――が、アーティストによるキュレーションという大義名分のもとに堂々と（といっても、子どもには見えない高さのケース入りで）展示されていた。博物館としては、ちょっとずるい「逃げ道」である。（山中由里子）

●表紙：みんぱくの映像音響資料収蔵庫の隅にあった、かつてフィルムなどが入れられていた空き箱
撮影・下道基行

次号の予告

特集

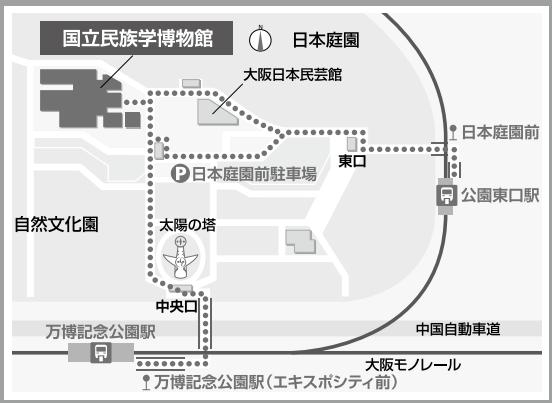
交流の場としてのアイヌ文化展示

月刊みんぱく 2016年10月号
第40巻第10号通巻第469号　2016年10月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　河合洋尚　菅瀬晶子　丹羽典生　南真木人　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

ハラハラ、ドキドキ、ワクワクがつまっています。

特別展「見世物大博覧会」関連商品のご紹介

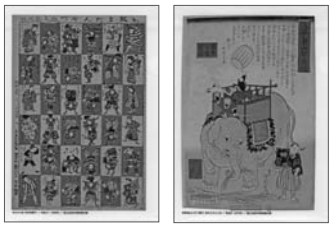
9月よりみんぱくで開催中の特別展「見世物大博覧会」(11月29日（火）まで)。特別展示館出口には、特設のミュージアム・ショップが展示に関連したグッズを取りそろえてみなさんをお待ちしています。

特別展の図録では、みんぱくや他館所蔵のもの、個人のコレクションから絵看板や錦絵、写真などの資料がフルカラーで約600点掲載され、江戸時代から昭和・平成まで、多種多様な様相を見せる「見世物」の世界が網羅的に紹介されています。

ミュージアム･ショップのオリジナルグッズはクリアファイルとTシャツです。Tシャツは、特別展のキービジュアルがカラフルなシルエットになったものと、碁石や金魚、電球などを飲み込んで自在に吐き分ける芸「人間ポンプ」をモチーフにした2種類があります。さらに、特別展実行委員の鵜飼正樹先生（京都文教大学教授）プロデュースのペナントも注目商品です。

いつの時代も、人びとをハラハラ、ドキドキ、ワクワクさせてきた「見世物」の関連商品を、ぜひお求めください。

ペナント　1,200円
人間ポンプの興行ポスターがモチーフになっています。



クリアファイル（A4サイズ）
各330円
左：「角兵衛獅子 おもちゃ絵」
右：「浅草奥山に於て興行 当年三才七ヶ月」

特別展図録『見世物大博覧会』
1,700円
国立民族学博物館編集・発行
全212ページ、A4判

「見世物大博覧会」Tシャツ
2,000円
白（サイズ：WM, WL, M, L, XL, XXL）
黒（サイズ：S, M, L, XL, XXL）

人間ポンプTシャツ
2,000円
サイズ：S, M, L, XL
※子ども用（100cm）も追加予定

お問い合わせ先
国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
TEL:06-6876-3112　FAX:06-6878-8421
e-mail shop@senri-f.or.jp　水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

※価格はすべて税抜きです。
※通信販売の場合、特別展会期中（11月29日まで）はクリアファイルとTシャツは送料無料でお届けいたします。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――――会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。
電話06−6877−8893（平日9：00 ～ 17：00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。